

# 史料

## 江戸時代の道路を往く (六)

路邊から展望せる江戸時代の姿相



渡部英三郎

### ◎旅の困難

江戸時代を通じて東海道を去來往復せる外國旅行は、何れも同じやうに、日本に於ける道路の完備せる状態を記し、旅行の安易さを物語つてゐるが、それは多くの衛士に身邊を護られながら最上の乗物の上から(外國使臣の參府旅行は略諸侯の參觀交代旅行の格式に依る)珍らしい異國の風景を心ゆくまで眺めつゝ、好奇に富んだ旅行を續けたからであつて、庶民の旅はそれほど安

易なものではなく、そこには交通施設の不備に伴ふ種々の出費や困難があり、また警察力の不十分に伴ふいろいろの危険が道中に彼等を待ち受けてゐた。旅に出る者が門出に際して家族と水盃をして出發したのも無理からぬことであつたのである。道中に巢喰つてゐる、ごまのはひは旅する者にとつて恐るべき脅威であり、旅行者が最も警戒を要したものである。道中で慣れ／＼しく話しかけられて道伴れ

となり、同宿の夜に路銀残らず盗み取られて途方に暮れた旅人の話などは講談や物語などにも傳へられてゐて、ごまのはひの概念は可なり一般的に知られてゐる。田舎出のボンヤリした參詣旅行者などは彼等がねらつてゐたよい鴨であつたらしく、その仕事のやり方などもなか／＼悪らつものが多かつたらしい。左に主として「民間省要」が記する所に據つてごまのはひの片影を紹介するであらう。

抑道中にごまのはひと言物ありて、旅人に害をなす事、道中の常なり。其事伊勢路を根ざして駿遠參の三州に亘り、山を越て東の方へ來るは稀なり、或は順禮、ぬけ參等の童、小野郎、總じて參宮の道に、其外初心の旅人多くは田舎ものなどをたぶらかし迷はして……。

といふから駿河、遠江、三河邊はごまのはひの根城であつたらしく、そして主として、前にも述べたやうに路上を填めて往來せる田舎出の伊勢參宮者の群などを的つて仕事をした。然しそれ等の地方以外に於いてもごまのはひが全く出沒しなかつた譯ではないことは他の諸街道筋でもその被

害を蒙つた物語りの遺つてゐることによつても知られるであらう。武士や旅慣れた商人などの中にも、被害を受ける者も勿論あつたであらうが、それはごまのはひ共にとつて勞多くして効少き相手であつたものと思はれる。

ごまのはひと云へば大抵、道中で旅人に慣れ合ひ、旅宿などで仕事をしたものゝやうに傳へられてゐるが中には随分ひどい念入りの手を用ひた場合もあつたことは次のやうな記述によつて知られるであらう。

前後人里遠き所につれて行、又其所に待居て、山伏、行人等の姿、又は僧形、社人杯の風情にて、紙に灰を包で持て出、是れを載けば道中災難なく、足手息災なり、是はそもいづれの山いづれの寺の護摩を灰にして、よのつねの物にあらず、貴きといふも愚也。中々難得事にして、凡夫の手にむざとふれまじき物なりといへど、我が慈悲の功德にして、今汝等には是を載かす、手洗ふてかしまるべしと、大いに仕懸て無理にいたゞかせ、いたゞかといなや、すぐに色々の事しかけて、おかしく取廻し

て、初穂の布施のといふて、側よりねだりかかひいさかひして、是にはその種類大勢なれば、其内に彼處、此處より或は旅人の形と變じ、又は武士に似せて一腰さし、様々の模様に出立來て證人と成り味方となり、兎角する内に、段々人集ておし廻し手ごめにして首にかけたるさいふ、腰の中着、懷中の鼻紙袋杯、よりたかりてうばいと、打はりねぢたほし杯、はふ／＼の體と成て、死すばかりのくやしさを、いたさに起き上りて見れば、いづしか彼のいさかひ相手に被<sub>レ</sub>成本人は行方しらず、殘る同類共有といへども、證請人取さい人、旅人、商人杯の出立の者も扱ても笑止のにくい奴の、吟味方めきたる者ども居ず、何れへと取て懸るべき様なし。とかくする内に皆ばらく／＼ちり／＼に行去て、殘るは只一陳の松風のみとなる。

一人旅の場合ばかりではなく數人の同行者があつても、時に、同様の災厄に逢ふことを免れなかつたことは、

縦同行の二人三人有分は、大勢にもみ立てられ所々へ

分れ、各丸はだかの仕合に成る多し。

といふ記述などの中に窺はれ、旅行の不安思ふべきものがある。然るに次第に旅人の警戒も嚴重となり、その筋の取締も厳しくなつて來るとそうした同じ方法で仕事をする事は困難となり手を代へ品を代へて工夫をこらした様子である。

或は色々の藥賣と成、又は人參さんご珠の類金目貫、小刀、小柄杯を通る先にて拾ふと見せ、種々にしかけてくはねば果はいさかひと仕かけて、右の手のごとし。

是も又たえぎれて近くは途中で居て辻ばくちを初め、わざととらるゝ様に見せかけて人ませし是にかゝると否や仕よりを付て、是も亦果はいさひとし、とかく大勢にて揉立て押立、人家遠き森林の中、或は野原の人聲聞えぬ所へ、いつとなく段々とおしてつれ行、はぎとる事にす。と記してあるなどは何れもごまのはひ一味が工夫をこらして次第に仕事の方法を變へて行つた有様を傳へるものであらう。これ等の方法は主として元祿享保の頃までにかけて

行はれたものであるらしいがそうした大袈裟な手段による  
ことが次第に困難になつて來ると。

此類の者共諸道中からまり居て、僧には僧と成、士  
には士と成、商人には商人の風に似せて、途中よりして  
ふと出て道連れとなり五日も七日も同道して衆と成伴と  
成て、終には旅人をたぶらかし、荷物風呂敷杯盜取る事  
あげて數へがたし。

といふやうに、ごまのはひの本態として、後世に傳へられ  
てゐる方法に變つて來たらしい。そしてごまのはひに就い  
て語り傳へてゐる物語りが一樣にこの潜行的手段をのみ舉  
げてゐるのは、少くとも江戸時代中葉以後に於いてはこの  
方法のみが彼等の採り得る唯一のものとして残されてゐた  
ことを示すものではあるまいか。

この無頼の徒によつて旅人の蒙る被害が輕からぬもので  
あり、且つ極めて一般的であつたことは、

千變萬化色々の工夫して、世を惑はし人を惱亂さする  
事、國家の患なり。

とこの文献(民間省要)の著者が嘆じてゐる程であつたにも拘ら  
ず、官憲のこれに對する取締は兎角徹底を缺き、生溫いも  
のであつた。同じ著者はそれに就て、

いまだ人を殺す程の事無にや、公邊より強て此根を制  
斷するの嚴命なし、誰か又かゝる事と知らせ奉らん惜哉  
と齒がゆがつてゐる。

今では知らないが、明治末葉の頃まで東京見物に來る山  
深き地方の老人などが、紙幣を着物の襟に縫ひ込んだりし  
てゐた風習は、斯うした旅の不安に脅えて來た古老の經驗  
などから、深く、その地方に根を張つて、遠く明治の代ま  
で、遺された風習であらう。

雲助もまた、ごまのはひと共に、旅人にとつて、殊に女  
の旅行者などにとつては氣味の悪い存在であつたことは、  
それが旅人等を困苦せしめた多くの物語りを遺してゐるこ  
とによつても知られるであらう。雲助といふのは宿驛に所  
屬せる旅稼ぎの朧蒙駕籠夫であつて道中の所々に徘徊して  
旅人の通行を待つてゐたものである。惡されたした無頼の

徒の代表の如く傳へられてゐるが、ごまのはひなど、異りそれ自體は當時の交通情勢が生み出した必要の機關であつて、疲れて行先を急がねばならぬ旅人の中には、それを途中に見出すことによつて屢々救はれた思ひをした者も少くなかつたことであらう。他日宿驛を中心とした物語を書く際に詳しく述べるであらうやうに、宿驛の制度は其附近一圓の農村にとつて重き負擔であつて、其の上宿驛の役人などが、幕府または諸藩の下級役人など、結托して不正を働き、規定以上の負擔を定郷、助郷に對して負はせる場合なども少なく、それがために、百姓は疲弊して飼馬を失ふ者などが次第に多くなり、且つ他の一面に於いては、交通量の増加に伴てそれに對する旅行者の需要が増加し、それがために需要に對して馬は非常に拂底の情態に置かれてあつた(享保年間頃に於いてきへ既に)のである。

段々馬士世上に拂底にして、道中宿々何れの國にも御傳馬役人共、近年ひたすら馬士に事缺き、漸々に尋求め見出し次第に抱へ置ゆへ、いか様に宜しからざる馬士も

羽を生じて飛が如く、高金を出してうばいあふて抱ゆるをかちとす。(民間省要中偏卷之四)

といふやうな有様であつたから、乗物による旅行者等は是非とも駕籠によらなければならなかつた。随つて幕吏、田中丘隅(民間省要の著書)などもその必要性を認めて次の如く言つてゐる。

是亦國家の道具にしてなくてはならぬ物なり。たとへば人々の家に雪隠と言物なくてはならずといへど、隨分むさきものなり。一時用を辨するまでをこらへて外、是非を言事無きに似たり。

然し道路交通上に於けるこの雪助駕籠屋の必要性を家屋の便所に比譬してゐる所に、當時の旅行者が屢々迷惑を蒙り、世間から兎もすれば毛蟲のやうに嫌はれてゐた彼等の人柄が忍ばれるのであつて、それに就き同じ文獻は、

夫れ駕籠とりと言物、一人旅などにしてつれにもなり又力にも成るといへど、まことに油斷すべからず。此内には色々に筋あしき者共あれば、かしこにかく、金銀の

有無を知らさぬを祕とすべし。

と戒めてゐるが、夕暮迫る頃など金持ちの一人旅などにとつて雲助が危険な存在であつた様子が偲ばれるであらう。

そして彼等が荒んだ氣の荒い人間であり、氣に喰はぬことがあれば、士に對してさへ、無禮雜言、時に狼藉をさへ働き兼ねない輩であつたことは、同じ著者が旅慣れぬ血氣の武士などを雲助に關し戒めて、

旅なれぬ衆若き衆杯の中には物とがめして一時の家來成と言出してもむづかし。兎角かん忍してそしらぬふりなどし、又そろ／＼行過る風情して、見ぬ體しらぬふりして過るにしくはなし。是れ己れ等の性にして止事なき境界なれば何の埒もなき事なり。士たる人などの取あげべき事にあらず畢竟武士の長旅行は、皆以てそれ／＼主人の奉公也、何ぞ卑賤の者の小事にかゝはり、身の大事を忘るべき。(下略)

と云つて所に、他人の弱味につけ込む、無頼な雲助の面影が見られるであらう。定め以外に酒代をなどねだることは

殆ど常例であつたらしく、そうした場合にも、事を荒立てるは損だから其日の天災と諦めると云つて旅人を次のやうにいましめてゐる所を見ると雲助といふ奴、餘程厄介なものではあつたものと思はれる。

かゝる事に出會つて言ひつりの、六ヶ敷なる事あらば、是其日の天災なりと觀念して、縦二重に賃錢費へ腹の立事あつとも、少しの事損して過るにしかじ。(民間省要)浪花節にある神崎與五郎勘忍の場面や、それに類する多くの物語などは何れもそうした雲助共の姿を傳へるものであらう。

殊に世を忍ぶ欠落ちの若き男女などは、駕籠昇、馬士共のねらつた鴨であつたらしく、そうした男女が駕籠にでも乗らうものなら、

忽馬士駕籠昇共に目利せられ、乗せて噉へ出、或は山中原中へ出などして色々ねだりせめ、過分の錢を取、金ども取よし。(右同)

といふやうなひどい目に合はされ、時には女まで奪はれて

了ふやうなこともあつたらしい。

その他船頭、馬士などいふもの、何れも當時の交通に  
缺き難き存在でありながら、氣の荒んだ人間が多く心弱き  
旅人等にとつては厄介な脅威であつたのである。

註 拙稿「徳川時代道路及道路附屬物史物語」——「道路の改  
良」一七ノ五参照。

馬士の中には、百姓の子が内職に、農閑の季節などに、  
自分の飼馬を追つて往還の旅人に乗せ駄賃を稼ぐ眞面目な  
者もあつたが、それ等の者は、容姿風俗見るからに、道中  
馬士とは異り髪月代も見苦しからず、衣服などもさつぱり  
洗濯したものが多かつたといふ。<sup>(1)</sup>この種の馬士の馬に乗つ  
た者が安心してよかつたかは、

旅人に乗せては、一時の知人たる事を思ひ、物事律義  
にいんぎんにして、馬の口をはなさず、ねだり事はざ  
る事の類にして、旅人の氣に背かざる故、折々酒錢など  
もらひても時宜していたゞきむざと一錢を遣ふことなく<sup>(2)</sup>

(下略)。

といふ記述によつても知られるが、これに反して年中道中  
に客を待つて日を暮す職業馬士は、

おかしく仕廻して酒手をねだり、道に高聲いさかひを  
仕ちらし、往來の妨と成、雷の落かゝるにも驚かず、武士  
に向つてもこゝを切れなどいふ首をのぼしてさすり、常に  
獄門はりつ付など言ふ雑言はきららし、身をかへり見す<sup>(3)</sup>

(下略)。

といふ有様であつたといふから、確かに旅人にとつて愉快  
な存在ではなかつたであらう。殊に女連れの旅行でもある  
とき、旅人等がさんぐ、苦しめられた物語などの多いのは  
事實そうしたことが屢々行はれたことの反映と見て間違ない  
であらう。

註 (1) (2) 及 (3) 「民間省要」中編卷之四

また年頃の娘や美しい妻などを連れ旅人は神社佛閣へ  
の参詣や、盛り場の見物中にさへ決して氣を許すことは出  
來なかつた。

神佛参詣諸見物の場並於道路女人に戯言を申懸、或は

奪取、旅人狼の體狼藉仕事甚以不可然。(1)

註 (1)「板倉政要」

神社佛閣の邊りや、その他の盛り場や、路上に於いてさへ、女に戯れ、それを奪へ去る者さへあつたからである。

これに對する取締令が出た程であるからさうしたことは屢々惹起された事件であつたと思はれるが、女をさらつて飯盛り女や女郎にでも賣ることを仕事としてゐた誘拐團でもあつたものか、その正體については明かでない。

次に當時、旅人等が人里離れた山道や、人通りの少い薄暮の街道などで屢々遭難した追剽強盜の類などもこの時代の旅行を危険なものとする大きな原因の一つであつた。

中には深夜、旅籠屋に目ざした客を襲ひ大金を奪取るやうな大膽不敵の盜賊もあつたか「民間省要」はそれに就いて左の如くに述べてゐる。

良もすれば往來の旅人盜の爲に逢ふ事段々右に書すが如し。其品數々有、或は同類の手を借る事なく、己れ一人して往來の旅人、武士などの主人なりの代參り、又

は諸事御用承て金杯持參するもの、且公用に通る人の扶み箱、跡付などとかく金目の可レ有荷物を見込で一人達て夜中に忍び入り、片手に拔身を捉て片手には灯持て、命をかけ忍び込込、思ひ切て旅人の寢所へ押入て物を取有、第一忍びの名人ならで不レ叶、或は邊より忍び込んで壁に付床の下に入も有、人有間を夜に紛れ入事も有といへど、人更に知る事なし。殊に手に能有て人をも人とも不レ思もの、かくする事に至ては、縦目を明て居る者が有とも、誰が是に敵すべき、多くはそら寝いりしてとらするならん。是等の大敵者は大方は一人立也。若同類有といふ共二人三人には過べからず。(中略)常には所々の湯場、惡所、道中筋、兎角人宿、食物等の有所に徘徊して、店先にても人を窺食盡ては又道中筋へ出て右の如し。とかく大き成事をして一ヶ月、三ヶ月、又は半年一年二年宛も暮す工みをなし、小さ成事には目を不レ懸……。

右によつて當時の旅人にとつて、たとへそれが武士であつても恐るべき脅姿であつた夜盜、強盜の相貌を想見する



ことが出来るであらう。そうした恐るべき強盜の正體は多く浪人者のなれの果や、または武家の不良息子のくづれや、時には出所も知れぬ山伏僧などもあつたといふが、食封の外へ抛り出された浪人者に斯如き惡の道へ嚮ふ者の多かつたことは、自然の成り行きでもあり。また一面憐れをそゝるものがある。それは浪人の置かれて在つた無告の境遇を示すものであり、また同時に、この時代の社會が、多くの浪人群を中心として重大な社會問題を醸成しつゝあつた事實を示すものでなければならぬ。

註 (1) 「民間省要」

元祿年間の頃、熊澤蕃山は浪人の陥つてゐた窮境につき近世無告の者多し、無告とは誰をたのみ、何方へよらむ便なく、何をして父母妻子ともに一生を送るべきやうなきものなり。……今に無告の至極は浪人なり。度々の飢饉に餓死せる者數を知らず……此本は國主郡主不勝手にして家中を扶持はなし、其上家中の物成少くなれば又家中の家來をも扶持はなす故なり、其外眼前多く出来る

諸浪人は人の知る所なり。(1)

註 (1) 「大學或問」

と記し、浪人問題が重大なる社會問題化せんとしつゝあつた趨勢を示唆してゐる。それはそれより約四十年前、慶安年間に於ける由井正雪一黨の謀反事件が齎結せる浪人群の不平と聯關を有つことなど、考へ併せ時代の姿相を躍如たらしめるものがあるであらう。貨幣經濟の發達、その土地經濟に對する壓迫に基因する幕府及諸蕃の財政的窮乏。それは泰平の繼續と共に次第に増加してゆく武士群を抱擁するを得ざる状態となり、封建政治の支持者であり護りでもある武士群の少からざる部分を驅つて、その呪咀者たらしめつゝあつた世態を示す。即ちこの後期封建制度が、當時既にそのけんらんたる表面上の華やかさの陰に、やがて衰微の運命を宿しつゝあつた世態を示すものに外ならない。そうした浪人の中には讀書き手習の師匠などして細々と兎に角正しく其日を過す者などもあつたが、生活に窮迫せる結果、次第に武士としての廉恥を失ひ、墮落の途に陥り

つゝあつたことは狄生徂徠が、

殊に武家の浪人と云者は工商の業をも不<sub>レ</sub>知親類近付の力にて計世を送る者なるに、近年武家の風儀悪く成、人々頼しき心消失、只利勘の心強くなる……見繼人無故渡世に困り、世間の悪しき風俗に引れて、偽証など種々の悪事をするに今は成たり。其上に長煩もするか、不仕合續けば右の頭に成也。<sup>(1)</sup>

註 (1) 「政談卷之一」

と記述してあるなどによつても窺知せられるであらう。當時旅人を恐れ慄ませた追剝強盜の類もその少からぬ者は斯うした境遇に生きた浪人などの「毒を喰は、皿まで」式の捨鉢な渡世の一つであつたものと思はれる。

尙その他にも、この時代に於ける旅行を困難ならしめた事情は種々あるが、煩しさを避けて記述を省略する。(完)

「附記」 本篇中で、江戸時代の道路交通を物語る場合に最も主要な題目となる宿驛制度をはじめ、橋梁、徒涉制、度路邊に展開せる周約農業の面影等々に關する物語に

まで及ぶ豫定であつたが、既に書いて來た分のみでさへ遙かに豫定せる紙數を超過せるばかりでなく、それ等の問題については資料の尙不充分であることに思ひ到つた點もあるので、一先づこゝで稿を結び、他日更に資料を蒐集して、新たに稿を起したいと思ふ(筆者)

一般的に小學校に於ては、もう少し實際に役立つ教育をやつてほしい。それは單に技術的に何か出來るといふことのみではなくて、實際社會に適合し得る生活意欲の鍛鍊である。これは殊に初等完成教育を目指してゐる高等科に於て大切である。

近頃の青年に往々見る如き徒に希望のみ大きくて實行力の伴はないのは要するに頭腦だけの教育から生じた畸形兒である。かうした生活意欲の鍛鍊は、教員自身が絶えず時勢の動きを洞察し理想とはつきりした生活意識を以つて兒童に接する處に可能となるであらうとは菊池寛氏の國民教育への要望である。これには共鳴者が少なくないことを信ずる。